

## 平成23年「野球殿堂入り」記者発表

事務局長代行 海北 光正

1月14日（金）午後3時より野球体育博物館の殿堂ホールにおいて平成23年の「野球殿堂入り」記者発表が行われました。今回は競技者表彰・プレーヤー部門で落合 博満さんが、同エキスパート部門で故・皆川 睦雄さんが殿堂入りされました。尚、特別表彰部門からの殿堂入りは、残念ながら今回はありませんでした。加藤 良三理事長の挨拶に続き、米谷 輝昭代表幹事より競技者表彰委員会の選考過程について、また、私から特別表彰委員会の選考過程について選考報告を致しました。引き続き、加藤理事長より殿堂入り通知書がお二人に授与され、顕彰者のご挨拶に移りました。

最初に落合さんより「野球界から頂ける賞は皆頂きました。殿堂入りは最後の賞だと思い、ユニホームを脱いでからと思っていました。それがこんなに早く表彰され戸惑っています。これからも野球界のために一肌でも二肌でも脱ぎたい。」と話されました。それに対してゲストの杉下 茂さんは「落合監督の殿堂入りは、遅きに失した。現役時代の実績や監督としても立派な成績をあげている。もっと早く殿堂入りしてもよかった。今年は是非日本一になって欲しい。」と落合さんを称えられました。

次に皆川 睦雄氏夫人の真智子さんが登壇され「2月6日の七回忌にいい報告ができます。」と涙ぐまれました。現役時代はいつも真智子さんが車で球場まで送り迎えをし、夏でも冷房はつけず、長袖を着ていたそうです。その甲斐もあって皆川さんは、18年間で221勝をあげました。ゲストとして、同期入団で皆川さんとバッテリーを組んでいた野村 克也さんは「彼は日本で初めてカットボールを投げた人です。当時、皆川さんは左バッテリーによく打たれていました。そこで二人で話し合い小さなスライダー（カットボール）を編み出しました。最初にオープン戦で王 貞治選手に投げ、セカンドフライに打ち取った時の彼のうれしそうな顔を今でもよく覚えています。」と興味深いお話を披露してくださいました。

その後、殿堂入りの方々の写真撮影を行い、多数の報道陣のご出席により熱気あふれる雰囲気の中、記者発表は無事終了しました。

尚、表彰式は7月のオールスター第1戦（ナゴヤドーム）で行う予定です。



左から 皆川 真智子氏、落合 博満氏



後列左から 皆川 忠裕氏、加藤 良三野球体育博物館理事長  
前列左から 野村 克也氏、皆川 真智子氏、  
落合 博満氏、杉下 茂氏



## 競技者表彰委員会

第51回の競技者表彰委員会は、プレーヤー部門から、史上最多となる3度の三冠王を獲得した現中日監督の落合 博満氏(57)を、同エキスパート部門からは通算221勝を挙げた「最後の30勝投手」故皆川 睦雄氏を野球殿堂入りに選出した。

野球体育博物館を訪れた落合氏は、球宴第1戦(ナゴヤドーム)で行われる表彰式に思いをはせていた。「やっぱりユニホームを着るしかないか。スーツを着てということは無理か」。全セの監督として本拠地で指揮をとる。そこが自らの表彰の場になる。これが殿堂入りした「オレ流」の喜びの表現だった。「ありがたい、うれしい」ではなく、半年後、表彰式に臨む「衣装の悩み」にして表した。

2年連続して1票差で落選したことも笑い飛ばした。「どうせなら3年連続1票差で落選した方が面白かったんじゃないか。他人がやらないことをやるのはいいことだろ。ハハハッ」。三冠王3度。首位打者、本塁打王、打点王を各5度。82、85年MVP。86年にトレードでロッテから中日に移籍し、初の1億円プレーヤーとなった。93年にはFAで巨人へ。さらに96年には自由契約で日本ハムに移り、98年に現役生活に終止符をうった。「野球界からもらえるものは全部いただいた。これが最後の賞でしょう」。78年のドラフト3位でロッテに入った。社会人の東芝府中を経て、入団時には24歳だった。そんな無名の存在が自らを信じて常に大きな目標を掲げ、道を切り開いてきた。



落合 博満氏

(写真提供：ベースボール・マガジン社)

現役監督の殿堂入りは1965(昭和40)年の川上 哲治、鶴岡 一人両氏以来となる。両氏が殿堂入りしたあとの68年に表彰規程が改正され、監督、コーチ、審判員は現役と見なされ、候補から外された。それが08年の改正で、プレーヤー部門は現役指導者であっても候補

になれることに戻った。「ユニホームを着ている間はこの賞とは無縁だと思っていた。いつか、もらえればいいなと思っていた。私だけでなく、女房、息子、息子の嫁と4人でささやかな祝杯を挙げたいと思います」。これもオレ流の、家族への感謝の弁だったのだろう。

皆川氏の殿堂入りには、真智子夫人が代わって顕彰を受けた。05年に敗血症のため死去。69歳だった。「2月6日が主人の七回忌。その前に球界の方に思い出していただき本当にありがたいです。いい報告ができます」といって涙を流した。常勝南海の右サイドスロー投手は、通算221勝(139敗)を挙げた。68年には31勝10敗、防御率1.61で最多勝と最優秀防御率の二冠に輝いた。これを最後にプロ野球に30勝投手は現れていない。



皆川 睦雄氏

(写真提供：ベースボール・マガジン社)

「あのうれしそうな顔が脳裏に焼き付いている」といって当時を思い出したのは、記者発表でゲストスピーチに立った南海同期入団の野村 克也氏(元楽天監督)だった。うれしそうな顔は68年、巨人相手のオープン戦で見せた。一、三塁のピンチで打席に入った王 貞治を二飛に仕留めたあとだ。試投した「ちっちゃなスライダー」が通じたのだ。シュートを武器にしていたが、左打者対策に野村とともに取り組んできた新球だった。「今でいうカットボールですよ。皆川はその先駆者なんです。もっとその功績をたたえてほしいな」と語った。その話を聞いていた真智子夫人は「主人はいつも、オレがあるのは野村さんのお陰이었습니다。今日もきていただき、本当に幸せです」。そういって、また涙を流した。

プレーヤー部門は、野球の取材に関して15年以上の経験を持つ委員(333名)が、7名連記で投票した。当選必要数は247票だった。落合氏は277票を集めて殿堂入りを決めた。エキスパート部門は、競技者表彰の幹





事と殿堂入り競技者（47名）が3名連記で投票、皆川氏が当選必要数の30を上回る35票を集めて、同部門から3人目の殿堂入りとなった。

（競技者表彰代表幹事 米谷 輝昭）

## 特別表彰委員会

特別表彰委員会の選考対象が4年前の規約変更で「主にプロ・アマの組織や管理に関する方」並びに「アマチュア野球を引退した競技者」で、野球の発展に顕著な貢献をした人と範囲が広がってきました。

昨年11月の小委員会での殿堂入り候補者10人を厳選しました。

昨年来の候補者として

- ①スコアラーの草分け、  
元南海ホークスの・尾張 久次氏
- ②プロ・アマの合流に尽くし  
「長嶋ジャパン」の生みの親・長船 駿郎氏
- ③箕島高校監督として甲子園春夏連覇、  
4回優勝の・尾藤 公氏
- ④金属バットの安全基準を作った、  
バット素材の青ダモ育成の父・大本 修氏
- ⑤大リーガーも「マジックハンド」と呼ぶ  
グラブの名匠・坪田 信義氏

新しい候補者として

- ⑥駒沢大学野球部監督35年、  
一部リーグで501勝22回優勝の・太田 誠氏
- ⑦高野連5代会長としてプロとの関係改善に  
尽力した甲子園優勝経験もある・脇村 春夫氏
- ⑧戦後の甲子園で1948（昭和23）年夏には全5試合完封で二連覇を達成。早大を経て八幡製鉄（現・新日鉄）でも都市対抗で優勝した  
小倉高校出身の・福嶋 一雄氏
- ⑨日本のリトルリーグを創設、世界大会の優勝など  
青少年の健全育成に尽力した・林 和男氏
- ⑩夏の甲子園大会歌「栄冠は君に輝く」、  
阪神の「六甲おろし」巨人の「闘魂こめて」  
さらに学生野球と多くの応援歌を作曲した・  
古関 裕而氏

以上10人が今回の候補者です。

プロ野球のデータを集めて分析するスコアラーだった尾張 久次氏。あこがれの甲子園で高校球児が胸弾ませて行進する曲を作り、スタンドを埋めたファンが声高らかに歌う応援歌を残した古関 裕而氏と殿堂入りの門は広がっています。

選考委員も多士済済、アマチュア野球の指導者、プロ野球の役員経験者、学生野球関係者には名誉教授もいます。野球史の作家、マスコミで健筆を振るベテラ

ン記者、私のように放送でスポーツを伝えた者もいます。既に殿堂入りしている長嶋 茂雄氏と張本 勲氏も昨年から特別表彰委員会に加わって会議に参加しています。

14人の討議は活発でした。それぞれの立場から推薦するもの、中には否定論もあります。共通する認識は球界全体の視野に立って、功績のあった方々を野球殿堂に迎えるという姿勢でした。1時間余に亘る討議のあと、感想を問われた長嶋氏が「凄い、凄いですね」とうなずいたのが印象的でした。

投票人14名、殿堂入りに必要な得票数は規約で75%、今回は「11票」。

投票は3名連記でした。

投票結果は

- ①長船 駿郎氏・10票
  - ②大本 修氏・9票
  - ③福嶋 一雄氏・7票
  - 林 和男氏・7票
- （以下省略）

殿堂入りの得票数に達した候補者がありませんでした。

早速、表彰委員会規定第18条により、「最多得票者3名、今回は3位2名のため4名に候補者を限定して2名以内の氏名を投票用紙に記載して再投票を行う」とことになりました。規約は「3回目の投票は行わない」としています。

再投票も必要な得票数は75%の「11票」。

投票結果は

- ①長船 駿郎氏・9票
- ②大本 修氏・9票
- ③福嶋 一雄氏・5票
- ④林 和男氏・4票

となり、殿堂入りの「11票」の得票者は居ません。18年ぶりの事です。

会議場に何とも言えぬ空しさが漂いました。議論が伯仲しただけに大きな落胆でした。その時、選考委員の一人、ノンフィクション作家の佐山 和夫氏が、ゆっくりした口調で全員に話しかけました。

「これは該当者が居ないからの結果ではないのですよ。殿堂入りに相応しい人が多いからこそなったのですよ」。

野球界に貢献した人々は多岐にわたります。間口を狭めては野球殿堂の本来の趣旨に背く、少しでも多くの先達を野球殿堂にお迎えしたい…。

それに相応しい選考方法が求められる時期を迎えていると痛感しています。

（特別表彰委員 西田 善夫）



## コラム／博覧・博楽 (37)



## 私の野球経験

篠原 一郎（野球体育博物館維持会員）

野球殿堂と同じく1959（昭和34）年に生まれた私はいつから野球を始めたか明確な記憶がない。気がつけば全盛時代の長嶋選手、王選手にあこがれてバットを持って遊んでいた。四国ではありふれた幼児だったのだ。

1972（昭和47）年、中学校に入った私は人生の大きな転機を迎えていた。その3年前の夏の甲子園で球史に残る激闘を制した松山商業の全国制覇の余韻は、松山市にはまだ色濃く残っていた。「松山商業で高校野球をやる」、と松山市の野球少年が考えるのは、「巨人に入ってプロ野球選手になる」、と全国の少年が夢見ることの縮図がその町にはあるかのような感覚だった。

大都市ほどリトルリーグが盛んでない当時の四国地方では、中学校で野球部に入るとするのは、それなりの覚悟が必要だった。

それは子供時代の終わりだった。それまであれほど楽しみにしていた日曜日もゴールデンウィークも夏休みも、野球部に入部した後は楽しいものではなく、普段の放課後よりも練習の長い日になってしまった。親と行楽というのも入部以降はただの一度もしなかった。休みたいときに横になることもできず、水を飲みたいときに飲むこともできず、苦しい練習が始まったのである。

中学の入部から大学4年の秋のリーグ戦が終わった日まで、部員でいる限りバットを振らなかったことは一日もない。夏季の練習は本当に何度も倒れそうになったが歯を食いしばって耐え抜いた。楽しいと思ったことは一度もなかったが、野球部員であるということはそういうものだと思っていた。

あしかけ10年にわたる学生野球生活の間にはいい思い出も少し悔しさも味わった。当時も今も夏の全国大会勝率1位を守り続けるレベルの高い愛媛県の高校球界に3年間身を置いたのは誇りだったし、ドラフト1位で4人も同学年からプロに指名された（連盟史上最多タイ）伝統の東京六大学で多くの観客に見守られて戦えたのも貴重な経験だった。

小学校時代以来の野球の楽しさに触れたのは就職してからの草野球である。草野球なのだから、遊びも苦しみもすべてそれまでの学生野球にくらべれば比較にならないほど小さなものである。

しかし、そこで私は長らく忘れていた本来のおおらかな野球を思い出し、そして学生時代に決して触れなかった野球の一面を見た。それはピッチングである。学生野球生活で私の喜怒哀楽は常に打席か守備位置の中にあり、マウンドにはなかったのである。

ON全盛時代の野球少年がスラッガーになりたいと思ったのは自然ななりゆきだったのだが、「愉悦」という表現がいちばんふさわしい投手の楽しみをそれまで誰も私には教えてくれなかった。いつのときも同僚の投手がする練習は野手より苦しそうだし打撃の楽しみもないし、プロを見ても選手生命は野手より短いし年俵は安いし、いいところは何もないと思っていた。

ところが草野球でふとしたきっかけでマウンドに上がり、野手とは全く違うスポーツをやっているような感覚であることに驚いた。

この紙幅で具体的な理由を書く余裕はないのだが、言わなくても世の中の投手たちは解っているのだと思う。「どうせ野手には投手の気持ちが解らない。それでいい」とつぶやくプロ野球の投手たちの声が私には聞こえる。

自分のここまでの人生でひとつやり直すことが許されるなら、投手として一から野球人生を始めたい、ということだ。

50歳を過ぎても草野球のマウンドは、その永遠の夢がひとときだけ叶う、私にとっての限られた夢舞台なのである。



1993年野球殿堂入り  
稲尾 和久氏レリーフ

## 殿堂入りの人々を語る (30)

### パパは神様

庄野 多香子 (稲尾 和久氏 長女)

「神様、仏様、稲尾様。」家族からすれば恐縮するようなこの呼び名の名付け親は、ファンの方だということを私が知ったのは父が亡くなった後のことだ。

2007 (平成19) 年の秋のこと、その数カ月前から背中を訴えていた父は、市内の大学病院に入院することになっていた。検査入院ということで「少しはゆっくりできるし、禁酒禁煙できるなら、たまにはいいじゃない。」と家族は口を揃えて父にそう言っていた。その2週間後に永遠のお別れが来るとは、本人も含めて誰も思っていなかった。坂道を転がるようなスピードで、あっという間に旅立ってしまった父。丸3年があっという間に過ぎてしまったが、正直亡くなったという感覚が未だにない。

しかし、一方で私は父が他界してからこの3年の間に、改めて知ることができた父の姿がある。ピッチャーとして、あるいはコーチ、監督、野球解説者としてどんな風に仕事をしていたのかを、生前父と関わりのあった方や、父の死を悼んでくださる方々から直接伺うことができたからだ。沢山の思い出話と、お悔やみの言葉を頂戴して、父は本当に周囲の方々に支えられ、そしてひとりひとりに何かを残して逝ってしまったのだと実感した。そして私たち家族と同じくらいに、父の死を残念だと思ってくださる方がいらっしゃる事が、家族としてとても有り難く、感謝の気持ちでいっぱいである。

私たち四人姉妹は、稲尾 和久を父親に持ちながら、野球の事をほとんど知らないまま大人になってしまった。母はマスコミに出るのが大の苦手だし、野球のルールも野球選手のことも、未だによくわかっていない。父は球界の住人。母と私たちは、ごくごく普通に生活してきた。そんな中で、私だけは母の代理として駆り出され、登場回数は多かったかもしれない。それが我が家の家風でもあった。

父は屈託のない人だった。陽気でダジャレ好き (ほとんどハズしていたが)、気持ちは温かく、機嫌が悪くて怖いなどと子供心に感じたことはあまり記憶にない。とにかくマイペースで、終わってみればいつも父の都合のよいように物事が運んでいた。ゴルフへの情熱も半端ではなかった。日本の上空をいつも父のゴルフバックが飛んでいるのではないかと思えるくらいだった。

口に入るものにはかなりのこだわりの持ち主で、福岡の民放のワイドショーのレギュラーになってからは、番組中で紹介されたレシピを見ながらキッチンに立つこともあった。小さな七輪に炭火をおこし「ひとり焼き肉」も定番だった。焼酎をこよなく愛し、どんなに遅く帰ってきてでも自宅の食卓で一杯やらなければ一日が終わらない人だった。食べ物には面倒がらない父も、それ以外のことは全く無頓着、机の上はいつも雑然としていた。そんなキャラクターの父ではあったが亡くなってから父の古いノートをみて、本当に驚いた。

横野紙にびっしりと書き込まれた文章。そしてきちんと色分けされたスコアブック。父のそういう面を娘としてまったくわかっていなかったことに、今はちょっぴり心が痛む。

この原稿の依頼を頂いてから、読み返してみた本がある。2002 (平成14) 年に出版された『神様、仏様、稲尾様』(日経新聞に連載された「私の履歴書」をまとめたもの) という本で、父の最後の著書である。

「殿堂入り」のことを父はどんな風に感じていたのだろうか? 1993 (平成5) 年東京ドームでのオールスターゲームの試合前に行われたセレモニーに、私と四女の妹が母の代理で出席した。元阪神の村山 実さんと父のふたりの殿堂入りである。野球素人の私と妹は満員のお客様の中グラウンドをびくびく歩いて行ったが、何だかとても晴れがましい舞台であるということだけは感じた。いつもより少し高揚した父の様子も覚えている。

その殿堂入りの事を父は本の中で「光栄だ。大先輩たちばかりの栄光の殿堂は私にとっての最後のタイトル…」と記している。

現役を退いてからは、監督、コーチとあまり芳しい成績を残せなかった父にとって、殿堂入りは野球を追い続けてきた人生へのビックタイトル獲得であったのだろう。それに続く文章には、時代の流れの中で野球もファンも変化してきていること、名選手の海外流出を憂い、日本の球界の為に尽くしたい父の気持ちが表れている。

この本の最後のページに、4人の娘について書いてある。(こんな文章があったことを、すっかり忘れていた。)  
「…その娘たちにできた孫には野球をする子が出てこないかと性懲りもなく期待している…。」私たち四人姉妹を「ストレートのフォアボール」とハの字の眉毛と細い眼をさらに細くして笑いながらよく言っていた。父は男の子が欲しかったのだろうが、現在男5人、女2人の孫に恵まれている。そして本の締めくくりは「白球を追いかける人生はまだ続きそうである」とある。

「神様、仏様、稲尾様」と呼ばれ、70歳で本当に仏様になってしまった愛すべき父。プロ野球の舞台で活躍の場を与えられ、沢山のの人に愛されてとても幸せだったと私は思う。

福岡のヤフードームの近くにある墓地で、きっといつまでも野球に思いを巡らせているに違いない。





## もの 知ってほしいこんな資料(73)

### 100年前の写真葉書 —1911(明治44)年7月ハワイでの慶應野球部—



今からちょうど100年前の1911(明治44)年7月、慶應野球部が第1回渡米遠征の帰路立ち寄ったハワイでの写真がポストカードになっているものです。この葉書はハワイで作成されたと思われますが、日本でも写真葉書は作られていて、当館では、1907(明治40)年からのこのような野球チームや野球試合を写した写真葉書を多く収蔵しています。明治時代の運動雑誌にはまだ写真が少ないため、この時代の野球の様子を知るには絶好の資料といえます。試合風景などは、試合後すぐに作られたため速報性があり、報道的な要素もあったと思われます。またチーム写真は、選手個々の顔が分かり、後のプロマイドのようなものだったのではないのでしょうか？

日本の野球史からみると明治時代の終わりごろは、1905(明治38)年に早稲田大学が日本チーム初の海外遠征として第1回渡米遠征を行い、最新の野球技術を日本へ持ち帰りました。1907(明治40)年に初の外国チームとして、ハワイ・セントルイスが、1908(明治41)年に初のプロチームとしてリーチ・オール・アメリカンが来日。1910(明治43)年にはスポルディングのルールを完訳した『現行野球規則』が発行され、ルール上での日米の時差がなくなりました。また、慶應チームは1910(明治43)年暮れから翌年の正月にかけて、アーサー・シェーファー(ニューヨーク・ジャイアンツ遊撃手)ら現役大リーガーの指導を受け、ジョン・マグロー監督の直伝の科学的野球を学ぶなど、明治時代の初めに伝えられた野球が、大いに発展をした時期です。

そして、今からちょうど100年前の1911(明治44)年には、慶應の第1回渡米遠征だけでなく、早稲田の第2回渡米遠征もあり、早慶共に米国遠征が行われています。

学芸員 新 美和子



こんにちは図書室です



### 『日本女子オリンピック年鑑』(1924年 中央運動社発行)

今回は『日本女子オリンピック年鑑』をご紹介します。この年鑑は、1924(大正13)年に行われた日本女子オリンピック第1回大会を記念して中央運動社から出版されました。大会記録だけではなく、女子スポーツ全般についての評論や1922、23、24年の陸上競技・水泳・庭球(硬式、軟式)・野球・排球(バレーボール)・籃球(バスケットボール)などの記録や各競技の規則も掲載されています。

大会記録を見ると野球に出場したのは大阪から市岡、泉南、和歌山から和歌山、粉河の4つの高等女学校で、決勝戦は14-11で和歌山が粉河を降し優勝しました。巻末にある女子野球規則(中央運動社編)を見ると、塁間は70尺(21.21m)で、7回制を採り、ゴム製のボールを使用、グラブ・ミット・マスクは任意となっています。巻頭のグラビアにはマスクを着けていないキャプ

チャーが写っています。この大会の様子をのちに日本高等学校野球連盟の会長に就任する佐伯 達夫氏(1981年殿堂入り)は「私の胸中に画いて居た想像よりも遙に見事であったのには一驚しました。…中略…私の女子野球に対する想像が余りに低かった」(スポーツマン 1924年8月号より)と語っています。

当時の女子野球は女子総合スポーツ大会の種目として採用されるほど盛んだったのでしょうか。

司書 茅根 拓





## 野球体育博物館 トピックス (2010年11月～2011年1月編)

### 【11月22日】ジャイアンツ新入団選手が来館



①



②

澤村 拓一投手ら12名の選手が来館、当館外にある戦没プロ野球人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」を訪れた後、館内の野球殿堂や展示を見学しました。

写真1 殿堂ホールにて原 辰徳監督のルーキーイヤーのユニホームを囲んで記念撮影

写真2 沢村 栄治氏レリーフの前で記念撮影

### 【12月17日】桑田氏、田中投手(楽天)が来館

桑田 真澄氏、田中 将大投手(東北楽天)が来館、野球殿堂ホールでの対談や館内の展示を見ながら話をすることが撮影されました(TBSテレビ「S☆1」1月放送)。

写真1 野球殿堂のレリーフを見ながら話をする桑田氏、田中投手

写真2 金田 正一氏の展示を見る桑田氏、田中投手



①



②

### 【2011年1月14日】全日本軟式優勝 日通四国メンバー来館

天皇賜杯第65回全日本軟式野球大会(2010年)で優勝した日本通運四国(香川)のメンバーが来館しました。同チームの優勝記念写真を展示した軟式野球コーナーの前で、奴賀監督を中心に記念撮影を行いました。

写真 日本通運四国のメンバー



## 博物館からのお知らせ

### ▼販売中!

#### ▶東尾 修氏野球殿堂入り記念直筆サインボール

25,000円(税込)



平成22年に野球殿堂入りされた東尾 修氏の直筆サインボールを販売しています。ご購入ご希望の方は、当館ホームページをご覧ください。  
(<http://www.baseball-museum.or.jp>)

\*数に限りがありますので、お求めはお早めに。

#### 商品説明

[ボール] NPB公式ボール 直筆サイン入り  
[素材] ケース: ガラス/台座: 木製  
[色] ケース: 透明/台座: ブラウン  
[サイズ] ボールケース: 縦14.5cm×横13cm×奥行(台座含)13cm  
[付属品] 野球体育博物館証明書、野球殿堂2009(書籍)、野球体育博物館ご入館券(6枚)

### ▼訃報

12月9日、当館の事務局長・佐藤 宏(享年 58歳)が逝去いたしました。

2008年3月に事務局長就任以来、皆様方には大変お世話になりました。ここに生前のご厚誼を深く感謝いたしますとともに、今後も変わりなく博物館へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

### ●博物館のご案内

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日～9月30日 AM10時～PM6時  
10月1日～2月末日 AM10時～PM5時  
(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大人 500円(300円) { ( ) は  
小・中学生 200円(150円) } 20名以上の団体  
65歳以上 300円

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)  
年末年始(12月29日～1月1日)

#### 《2月・3月・4月の休館日》

2月 7日・14日・21日・28日

3月 7日・14日

4月 11日・18日・25日

#### ●編集後記

先日の殿堂入り記者発表は、約100人の報道関係者と入館者の方々とはいっぱいとなった殿堂ホールで行われました(写真)。お越しいただいた皆さんがニコニコしたお祝いムードの中、40分ほどで記者発表は無事に終了しました。(詳しくは1～3ページをご覧ください)



### Newsletter Vol.20 / No.4

2011年1月25日発行

編集・発行 財団法人 野球体育博物館

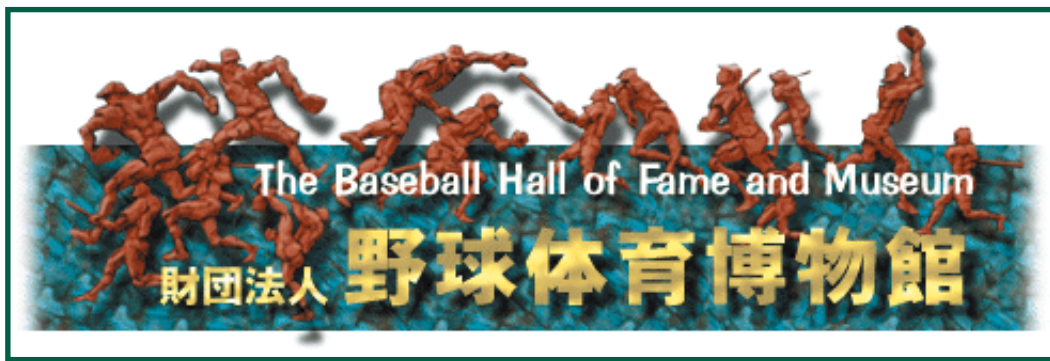
〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369

<http://www.baseball-museum.or.jp/>

定価 100円





## リレー随筆(43)

### すき焼きと猛虎

競技者表彰委員会幹事 内田 雅也（スポーツニッポン新聞社）

当時阪神タイガース捕手、山本 哲也さん(76)は「あの晩はすき焼きだったなあ」と言った。1959年（昭和34）6月25日、天覧試合の夜である。

このところ、タイガースの昔話を聞き、調べる機会が多かった。昨年11月から年末にかけ、スポニチ（大阪本社発行分）で連載した『猛虎の地～あの場所はいま』は、球団創立75周年を迎えたタイガースでの歴史上ゆかりある土地を訪ねる、といった趣旨だった。山本さんには1950年（昭和25）から1969年（昭和44）まで20年間、東京での定宿だった本郷の清水旅館の思い出をうかがった。清水旅館の跡地は本郷台中学校の体育館となっていた。

試合は9回裏、村山 実が長嶋 茂雄にサヨナラ本塁打を浴びて敗れた。阪神の選手たちは、いつもそうしていたように、ユニホーム姿のまま、坂道を歩いて上り、清水旅館まで帰った。風呂を浴びて、大広間の食卓についた。食事を用意した側、旅館主人の妻、清水 昌子さん(83)は「どうでしたか……。あのころはすき焼きが多かったですけど」と曖昧だが、食べた方の山本さんは「間違いない。すき焼きだったよ」とはっきり思い出した。「どういうわけか、食べ物の方はよく覚えているんだよなあ」

確かに、関係者の記憶に残っているのは食べ物の話が多かった。なかでも、よく登場するのは、すき焼きである。

球団創設初年度1936年（昭和11）、甲子園球場の近く今の甲子園九番町に「タイガースばあさん」が住んでいた。初代主将・松本 謙治郎が書いた『タイガースの生いたち』（恒文社）に逸話がよく出てくる。例えば36年6月、初の朝鮮遠征を前に松方 正雄球団会長主催の壮行会が甲子園ホテル（今の武庫川女子大甲子園会館）で開かれた。〈特に熱心な数名のファンも招待された。このなかにタイガースばあさんもいた〉

今では謎の多い「タイガースばあさん」を調べた。名前を田野 エイといった。孫娘の堀井 浜子さん(83)に話が聞けた。元オリックス・スカウトグループ担当部長、堀井 和人さん(62)の母親である。

若林 忠志、藤村 富美男や巨人の沢村 栄治がよく訪ねてきた。自宅前に4軒の家を建て、「モンちゃん」と呼んでかわいがった門前 真佐人や堀尾 文人を住ませた。「選手たちが来ると、おばあちゃんはよくすき焼きを振る舞っていました。しっかり食べなさいよ、とか言って、実に楽しそうに食卓を囲んでいましたよ」

明治大時代、「すき焼きでご飯16杯」を誇っていた松本 謙治郎が「彼にはとても勝てそうにない」と白旗をあげたのが若林 忠志だった。ハワイ生まれの若林が米ストックトン野球団の一員で初来日した1928年（昭和3）、東京・二子玉川の料亭ですき焼きの歓迎会を催した。松本は若林と同席となった。〈若林は肉の片方だけ色づく、と、どんどんあげるのので閉口したが、私もこれを見習って競争することになった〉。日本ではまだ牛肉をレアで食べるなどなかった時代である。競争の結果が「勝てそうにない」だった。

そんな若林も景浦 将にはかなわなかった。「1貫目（3750<sup>㌔</sup>）は自信がある」という景浦に「食べたらず5円出す」と約束した。今も甲子園球場横に残る甲子園テニス倶楽部でのすき焼き会。景浦は山盛りとなった肉を黙々と平らげ、若林は約束通り支払ったそうだ。

球団草創期からなじみ深いすき焼きだが、最近ではほとんど食べなくなったようだ。遠征先ホテルでの夕食もバイキング形式が主流となった。猛虎の先人たちが好んだすき焼きが恋しい。

昨年5月に他界した元OB会長の田宮 謙次郎さんの話を思い出す。「昔はよく鍋を皆で囲んで食べたものだ。そんななかで、自然とチームワークが生まれたり、野球の話が深まったりしたものだ」。キャンプ地の高知県安芸市で一緒に鍋を囲んだことが幾度かある。田宮さんの好物も確か「すき焼き」だった。